

災害ボランティアネットワーク通信

2016年版
《後編》

NPO法人

災害ボランティアネットワーク

茨城県土浦市水海二〇一九

Tel 0280-91-3090

Fax 0280-23-2281

<http://saigai volunteer.net/>

Dさん（女性）

今回は追弔法要に参加させていただきありがとうございます。5年前の今日の日は決して忘れられるものではありません。

私は尾崎に住んでいました。嫁に来て55年、町の人たちと一つの家族のように、子や孫たちと何の心配もなく楽しく暮らしていました。あの日を境にみんなバラバラになってしまい悲しい思いをしました。今このときになって改めて悲しい思いになります。

しかし、皆さんのようにラーメンを作ってくれたり、お話ししてくれたりするなかで、これ

から新たな一歩を明るく元気に過ごしていきたいと思います。

水浜の人たちにも本当にお世話になって、別れるのがつらくなりました。ですが、皆さんそれぞれ一人一人の生活がありますので、いつまでもよくよしではいけないと思っています。子どもたち、孫たちを亡くされた方々のことを思うとわがままを言っではいけないと自分に言い聞かせながらも、涙がついあふれ胸がいっぱいになります。

尾崎ではお寺さんが避難所になりました。津波が来るというこ

二〇一六年三月十一日 三反走仮設法要 座談会

この五年間を振り返って 後編

とで山道を上りました。あの日は本当に寒く雪が降っていました。山から見えていて最初の波は小さかったのでこれで終わりかなと思つたら、間もなく本当に真つ黒く瓦礫を巻き込んだ津波が来ました。家や車などが混ざってきました。家が壊れるバリバリという音は本当にすごく、流された屋根に乗っていた人の「助けてくれ」という叫び声が聞こえました。でも助けることなんてできませんでした。その有様は本当に地獄の底を見たようでした。その光景は一生忘れれることはできないと思います。

震災の日でしたが、夜の空は星空で本当にきれいでした。今まで見たことがないくらいでした。本堂に避難して、蝋燭を灯しながら

でしたが、皆が一緒だったので心配や不安はありませんでしたが、学校の子どもたちのことだけは皆で心配していました。

そして3日後、学校（大川小）の生徒たちが皆流されてしまったという話を聞きました。あの時の悲しみと聞いたら本当に何とも言えないものでした。尾崎は孤立状態になっていましたので、ヘリコプターで捜索に来る人に、手ぬぐいでもなんでも振って助けを求めました。年寄りから順にビックバン（河北総合センター）、中学校の体育館に移っていききました。私は着の身着のままヘリコプターに乗せられて、上空から釜谷を見た時、あまりの光景に驚きました。残っていたのは診療所と、私たちの母校の大川小学校だけでした。我が家がどこで何がどこなのか分かりませんでした。その後、中学校に避難して皆さんの支援のおかげで今に至っています。

今後、これから

東日本大震災により被害を受けられ今尚、苦難の生活を強いられておられます皆様にごころよりお見舞い申し上げます。

2011年3月11日、大多数の犠牲者と甚大な被害をもたらした東日本大震災から5年が経過し、2017年3月11日で6年をむかえます。

多くの方々の尽力によって少しずつ復興は進んでいます。が、今だ、被災者の方々は仮設住宅での暮らしを余儀なくされています。

海で生きていた方々の高台移転はまだまだ時間がかかり、住宅再建や仕事などの経済問題をはじめとするさまざまな問題を抱え、今も困難な生活を強いられています。この現状では、「復興」にはまだまだ時間がかかると言わざるを得ない状況です。

今後、復興住宅へ生活の場が変わっていきますが、今まで仮設住宅で築いてきたコミュニテ

ィーが解体され、「孤立」「孤独」が問題視されてきている中、どのようにコミュニティーを再構築していったらいいのか？ これが今後の大きな課題となります。

これからも現地へ行ってこの目で確かめ、「風化」させないために本当の現状を伝え続けていきたいと思えます。

「忘れないで下さい」

被災地で何度も耳にしてきた

言葉で